

今月の谷口雅春先生のお言葉

夫婦が互いにほめ合う家庭にしましょう

男女それぞれの尊さが結び合わされたのが
家庭である

男性と女性とは剛柔各々天分が相異そういっていて、それぞれの美と優秀性とを備そなえているのであります。そして二つが相揃あひそろうたとき全まったき美と優秀性とが備わるのです。絵画に反対色の配合美ということがあります。男女一対の美はまま、ままに、反対色の美であるのです。水色と赤色とは反対色でありますが、単独にこれを見ると、水色も美しく、赤色も美しいのです。水色が赤色よりも美しいという理窟りくもないし、赤色が水色よりも美しいという道理

もありません。どちらも美しいが、その美しさが異なるだけであります。そして二つを結合し配合する時一層いっそうの美しさが出来るのです。男性と女性との価値と美とは、水色と赤色との価値と美との如ごときものであります。どちらも尊く美しく、ただその尊さ美しさが異なるだけではありません。だから、男性は女性を軽蔑けいべつしてはならないし、また女性は男性を軽蔑してはならないのであります。天は地を軽蔑してはならないし、地は天を軽蔑してはならないのです。どちらも尊び合いつつよく結ばれたのが上々の家庭であります。

(新編『生命の實相』第24巻124～125頁)

良人^{おっと}または妻の欠点を見ないように

人間の实相は「神の子」であり、「仏子^{ぶつし}」であり、ミコトであります。吾々^{われわれ}は吾々の良人^{おっと}の中に、妻の中に、その実相を見て家庭生活を営まねばならないのです。吾々は、互々^{たがいがい}の人格のうちに「神の子」を見、「仏子」を見、ミコトを見て尊敬しなければならぬのであります。一旦^{いったん}迎えた良人^{おっと}なり妻なりは外面に現れた現象がどうあるとも、その現象の悪さを以^もつて、良人^{おっと}そのもの、または妻そのものの悪さと思つてはならないのであります。ジャン・バルジャンが盗み^{ぬす}をしていても盗みをしていない本来善い人間であるところの实相を見て、遂^{つい}にジャン・バルジャンを善人にしてしまった彼ミリエル司祭^{しさい}のように、吾等^{われら}は良人^{おっと}又は妻の本来「神」なる実相を見なければならぬのであります。出来るだけ妻は良人^{おっと}の、良人^{おっと}は妻の、欠点を見ないように、暗い方面を見ないようにしなければならぬのであります。肉体人間は

「実相^{じつそうぶつ}仏」ではないから、時には躓^{つまず}くことも、実相が蔽^{おほ}われて悪く観^みえることもあります。しかしその悪さを实在であると思わないことです。その悪さはやがて過ぎ去り行くべき仮^{かり}り、その迷いの雲だと思ひ、光り輝く善^{ぜん}そのものの良人^{おっと}又は妻の实相を觀^みるように心掛けよ。たちまち、その悪さは消え行^ゆきて本来「神の子」なる良人^{おっと}又は妻の实相が輝き出て、家庭は異常に光明化されることになるのであります。

(新編『生命の實相』第24卷128〜130頁)

良人^{おっと}または妻の善さを深く信じる

良人^{おっと}又は妻の善さはどれだけ深く信じても好^よいのです。信じて信じ過ぎるといふことではないのであります。信ずれば信ずるだけ光を放つのです。信じていたのに裏切られましたというのは嘘^{うそ}であります。それは信じようが足らず、信じていても信じていることの言葉又は態度での現わしやうが足らず、信じていても相手の人格の自

由をこちらの型に嵌め縛ろうとした場合が多いのであります。本当に相手の価値を信じていたならば相手をもんなに自分の型に嵌めようとはしなかったに違いありません。自分の型に嵌めようとするのは、やはり、相手それ自身にまかせておいては何か善くないことが起るに違いないと危惧するからであります。危惧は信頼の足りなさの表現でありましょう。

(新編『生命の真相』第24巻130頁)

肉体とみえる奥には「神性」がある

現に悪しく現れている良人、または妻を、どうしてその善さのみを見ることが出来るでありませんか。問うをやめよ。肉体としての顕れは人間ではないのであります。彼自身ではないのであります。真の人間は、真の彼自身は、肉体の奥に埋されている「神性」であり「仏性」であります。現われは如何にもあれ、常不軽菩薩のように、良人は妻の、妻は良人の、真相を観て、その

「神なるもの」を賞め讃えなければならぬのであります。「ああここに真実よき良人がいる」「ああここに真実よき妻がいる」「ああここに真実よい子がいる」そう思つて皆様よ、家族の者たちよ、互に相愛せよ。

吾らすべての人間の真相は「神子」であり、「仏子」であり、どれほど讚嘆し合つても言い顕わすことが出来ない善美の真を備えているのであります。そう思つて人間を観よ、良人を観よ、妻を観よ、両親を観よ、子を観よ。そう努めるとき、その善さは次第にハッキリと見え来て来るであります。相對する人間が変貌し、家庭が変貌し、全世界が変貌し、全世界のすべてがその人の前で光り輝いて見えて来るであります。何とうそれは愉快なことであります。悪しきことの一は姿を消して、光り輝く真相のみが見えて来るのであります。

吾々が一切のものの、一切の人間の、真相を観るに心の眼が慣らされてくるときは、立ち対う世界が美しく輝く世界に変貌して来るばかりでなく、自分自身が、